

## 明治における喜遊物語の誕生と分化：テキストの「文脈化」の一例

鈴木 紗江子

横浜には「異人客を拒絶し辞世の句を詠んで自害した幕末の遊女喜遊」の口承が存在する。この伝説は明治初期の数年間のみ、国民教化政策の道具として版本の中で盛んに文章化・視覚化された。本研究では、喜遊物語の誕生・改変・衰退の軌道が、文学テキストの変容、特に書誌学者 D. F. マッケンジーのいう、政治的・社会的・技術的要因によって制作、伝播、改変される「物質としてのテキスト」の変容を、具体的に示す恰好の例であることに意義を見出し検証を進めた。

殊に、この発表では、出版者・作者機能の境界線が曖昧な近世的慣習のもと書籍化された喜遊物語を、版元によるテキストの「文脈化」という行為を通じ論ずる。ここでいう「文脈化」とは、出版者が権力の求めに応じつつ、読者獲得のために行った戦略を指す。具体的には、版元が 1) 実録物・人情本といった版本のフォーマットを用い、定型化された喜遊像を創作・改変し、読者へ提供していったこと。2) 列伝や百首歌集の主題に沿うように物語を収載し、喜遊像を意味付けたことの、以上二つがそれである。

第一の「文脈化」は、当時の出版広告が裏付けるように、近世出版の形式と内容の約束事を熟知した読者の喜遊像享受に影響を与えたと考察される。事実、「三条の教憲」に触発された『近世紀聞』(1874)の版元辻岡屋文助は、実録物形態によって「尊王攘夷の遊女喜遊」の実在性・政治色を強調し、人情本を得意とする版元大島屋伝右衛門は『春雨文庫』(1876)の中で、虚構性・道德色の強い「孝女喜遊」へと変身させている。一方、第二に関してはやや強引な「文脈化」が目立ち、この点こそが却って女性国民の手本としての喜遊の限界を示している。大川屋錠吉が良妻の伝記集『近世名婦百人撰』(1881)の中に、場違いな「孝女喜遊」を収載したことは、その一例である。換言すれば、喜遊という題材は、明治中期以降、徐々に女子教育政策の根幹となっていた良妻賢母主義のための喧伝装置を作るには相応しくなく、それが出版ブームの短さの一因だったと推察される。

パンデミックの状況下、全データの収集はデジタル資料によって行なった。この試みは、デジタル化された古典籍を用い文学研究することの、可能性と問題点を考える良い機会となった。今後も、海外の限られた資料アクセスに対処するため、デジタル環境の有効利用法を模索するつもりである。同じ志をもつ個人・グループの方々と、地域・言語を問わずネットワークを構築することも、本発表の目標の一つである。